

【Meeting Room 4】パネル2

東南アジアの境界域および紛争経験社会からみた共生的関係と身体

代表: 堀江 未央
(岐阜大学)

本パネル企画は、東南アジアとその隣接地域および紛争経験社会における、人々の共生的関係のあり方に関する比較研究の中間報告である。東南アジアやその隣接地域では、多民族の隣接居住や混住が常であり、様々な言語・宗教・文化が共在してきた。他方で、国民国家の管理や統合の強化、政治経済的諸変化のなかで、対立が表面化・激化するケースもある。異なる文化社会的背景を持つ人々を国民国家の内部に包摂していくために、各地で同化政策、社会統合、多文化主義など様々な政策がとられてきたが、ローカルな場で見られる共生的関係は、規範的な「共生」理論や普遍的な人権主義が前提とする西欧近代的個人主義ではなく、各地の身体観に基づく社会関係によって成り立っている部分も大きい。

本パネルでは、こういった身体のあり方に着目しながら、地域知に根差した共生的関係とその弾性に着目し、5人の共同研究メンバーが報告を行う。本報告では、共生という状態を、異なる集団が、相互に他者の生を否定せず、他者に対する志向性を持つ状態が保たれていること、と幅広く設定する。そのなかには、①濃密な関わりあいのなかで、自他の境界が曖昧になるほどの親密さと衝突を経験するような関係、②他者性を前提としつつも近しさによる慣れに基づいて共在する関係、また、③他者化の言説が常態化するなかで、それでも他者と接触し理解しようと志向する関係など多様な関係が含まれる。「メコンデルタ多民族社会の混交と忌避の語りから考える身体」(下條尚志・神戸大学)、「もめごとを／が生み出す関係——雲南ラフにおける移動と身体」(堀江未央・岐阜大学)、「中国南部トン族の平等主義社会における身体と差別と関係」(黄潔・名古屋大学)、「身体からみる宗教・民族的差異の動態——南部フィリピンにおけるムスリム・キリスト教徒混住社会の事例」(吉澤あすな・京都大学)、「バングラデシュにおける『他者』との共在——身体・場所・被傷性」(杉江あい・名古屋大学)の5つの事例をもとに、スケールの異なる様々な差異が前景化して対立や衝突に至る具体的な契機を取り上げ、そこからいかなる共生的関係がどのように発露しうるのか報告する。その後、インドにおける身体に関する人類学的研究の専門家である松尾瑞穂氏(国立民族学博物館)にコメンテーターとしてコメントいただく。

本報告では、途絶した共生的関係を再度切り拓く可能性として身体に着目する。身体は、可傷性(vulnerability)を帯び、他者とのあいだに共苦や共感、響応を生み出すが、同時に、身体を取り巻く文化的コードは、他者の身体を構成要素の異なるものとして差異化する言説も生み出しうる。そのような身体に関わる言説と直接経験のなかに共生的関係の契機をとらえ、共生概念の精緻化に向けた議論を行う。

【Meeting Room 4】パネル2

バングラデシュにおける『他者』との共在 身体・場所・被傷性

杉江 あい
(名古屋大学)

鷺田 (2013) はエマニュエル・レヴィナスに依拠し、①他者に晒され、他者から暴力を被り、他者によって自己が傷つけられる可能性、②他者が被った傷、苦痛、他者の死によって自己が傷つけられる可能性という 2 つの意味の可傷性について述べている。本発表は、2017 年 8 月以降のバングラデシュにおけるロヒンギャ難民受け入れを事例に、2 つの種類の可傷性の動態を、空間と時間の共在性 (佐川 2011) に着目して検討する。本発表では便宜的にバングラデシュ政府から難民認定ないしは "Forcibly Displaced Myanmar Nationals" と認定された人びとをロヒンギャ難民とし、この人びとを除いて、バングラデシュのビルマ国境沿いに暮らす人びとをホストコミュニティと呼ぶ。

2016 年 10 月以降のビルマ情勢から大規模な難民発生を見込んでいたバングラデシュ政府は、当時「不法移民」として扱っていたロヒンギャをこれ以上国内に流入させないようにするため、国境の守りを固めていた。しかし、2017 年 8 月 25 日以降、ナフ川に流れ着いた子どもたちの遺体や、傷つき、今にも死にそうなロヒンギャ難民たちを前にして国境は開かれ、ホストコミュニティや県外のバングラデシュ人も救援にあたった。これは②の可傷性に対する「選択以前の応答」であったと考えられる。

しかし、新たに 70 万人を超えるロヒンギャ難民を受け入れたバングラデシュは、恒久的な受け入れの覚悟無しにしてしまった「選択以前の応答」に、どう対処するのかをめぐって今もなお混乱しているようである。政府はロヒンギャ難民に対して国際難民レジームに基づく本格的な人道支援を 2017 年 9 月半ばから開始し、食料などは支給しているものの、移動や通信を制限し、安定した雇用や中等教育の機会を与えていない。母国帰還が一向に進まない中、ホストコミュニティからは、土地や燃料、日雇いの働き口などの資源の喪失、ロヒンギャ難民への支援の集中に対する不満、ロヒンギャ難民による窃盗、麻薬取引、殺人にまで発展する難民同士の小競り合い、武装勢力の存在に対する不安や恐怖の語りが聞かれた。すなわち、ホストコミュニティの間では②の可傷性が後景化し、ロヒンギャ難民の身体が自らの生への脅威として受け止められ、①の可傷性が前景化してきたと言えよう。

ホストコミュニティとロヒンギャ難民は同じ空間に共在しつつも、ロヒンギャ難民はあくまで一時的な滞在者とされるがゆえ、両者には時間的な共在性が欠如している。時間的な共在性の欠如は、ロヒンギャ難民の諸権利を宙吊りにする構造的暴力を正当化する。さらにこの構造的暴力は、ロヒンギャ難民に対する国際難民レジームに基づく支援を必要とさせると同時に、ロヒンギャ難民を犯罪や暴力に向かわせる。その中で、ロヒンギャ難民とホストコミュニティの言説レベルにおける差異が (再) 生産され、ホストコミュニティの間でロヒンギャ難民の「顔」は悪によって捕えられたものとして描かれ、②の可傷性が覆い隠されつつある (バトラー 2007)。

メコンデルタ多民族社会の混交と忌避の語りから考える身体

下條 尚志
(神戸大学)

ベトナム南部メコンデルタは、河川と海域を介して、前近代から東・東南アジア各地から多様な背景を持った人々が行き交い、身体の接触を伴う社会関係が絶えず生成されてきた地域である。そうした関係は、19世紀半ば以降の植民地化、20世紀半以降の国民国家成立と国家間戦争に巻き込まれてゆくなかで、途絶や再編を余儀なくされてきたものの、文化的民族的混交は進んできた。本発表は、その歴史的過程の痕跡が社会関係に顕著に反映されているメコンデルタ沿岸部、バサック河流域のソクチャン省に焦点を合わせ、この地域に居住する人々による、身体と社会関係に関わる無数の語りの一部を考察するものである。具体的には、他地域からの移住者と通婚や混住を通じて関わってきたことを示す語り、他者を完全に異質な存在としてとらえて接触を忌避する語り、また異なる他者に特別な能力を持つ対象と意味付けし、畏怖・依拠する語りが、民族、出身地、呪詛、移動経験、紛争の記憶、地理的距離といった諸要素と複雑に絡み合っていて流布していることを示す。そうすることで、過去に紛争を経験したこの地域社会で現在、官製的な用語で「団結」と表現されることもある「共生的関係」をいかに理解すべきなのかを検討する。なお、本発表は、拙著『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』でも取り上げているが、大幅に再検討したものである。

ソクチャン省は、メコンデルタのなかでもクメール人、華人、ベト人の混住が特に進んできた地域であり、民族間の通婚が顕著に見られる。なかでも長期滞在したフータン社(行政村)では、「ラーイ lai(ベトナム語)」という言葉を用いて、自身のルーツが複数あることを示す語彙が広く使われる。「ラーイ」(クメール語ではカット kat)は、「種の混じり」を意味する。その用語自体には当該社会で差別的な意味合いはないものの、その語彙が流布する背景には、社会や国家によって度々カンボジアや中国という国外との結びつきや文化的異質性を連想され、紛争に巻き込まれてきた当事者達が、「異種の混交」性を否応なく自覚してきたことを示す。同時に、地域によってその語り方こそ異なるものの、呪詛や「毒薬」という概念を用いて異質な人々と自他の差異を強調し、食事や婚姻といった濃密な接触を避けようとする語りも存在する。他方で、クメール人が、華人やベト人とは異なる「少数民族」として特別な治癒・解決能力を持った存在として意味付けされ、日常生活の苦難に直面した都市住民などから求められることがある。この地域では、官民ともに「過去に紛争はあったが今は団結している」、すなわち対立から共生へと向かっていったとする単線的な歴史認識が存在する。その認識を理解する上で、他者の暴力へとつながる可能性を孕む自他関係について、人々がどのように折り合いを付けてきたのか、ローカルな次元で語られる混交と差異の語りから検討したい。

中国南部トン族の平等主義社会における身体と差別と関係

黄 潔
(名古屋大学)

本発表は、中国南部の少数民族の事例から、平等主義で社会を運営しようとする人々が、どのような身体観やそれに基づく諸実践を通じて隣人（内なる他者）・他民族との差別を強化したり解消したりして、村社会における諸関係を安定させ、共生関係を築いてきたか、考察することを試みる。とりあげる事例は、タイ系民族のなかで最も中国内陸部に居住するトン族である。

トン族は、主に中国の貴州、湖南と広西チワン族自治区に隣接する地域に居住している。調査地である G 村は、広西三江県の東北部に位置し、11 の父系出自集団の約 396 世帯が住んでいる。地域全体をまとめるために常設される制度も人物も存在せず、彼らの社会は、年長者に基づくリーダーシップの構造に特徴があり、もめごとの解決は民主的に選出された有能者によって調停される。一方、村レベルでは、先住者と後来者、同姓集団と異姓集団、本村と外村、通婚できる者と通婚できない者など、移住や移動による差別や「差異」（階層的な関係）がしばしばみられる。本発表は、先住者と後来者、通婚できる者と通婚できない者の関係を中心に、村社会における内なる他者や他民族との関係の表象を論じる。

G 村では、住民が語る「起源の地」から村に移動してきた歴史や定住の順序によって、先住者集団（＝優位）と後来者集団（＝劣位）の序列がある程度定着している。G 村において、既存集団は後に定住してきた集団に対して 2 つの措置を講じる。一つは、居住地と墓所の位置・村落祭祀への関与・服装や日常生活を律する慣習を規定することである。例えば、草分け集団の始祖を村の共通の始祖（守護神）として祀ること、村落祭祀の責任者は草分け集団の年長者が一貫して担当することなどが挙げられる。もう一つは、兄弟などの親族関係を取り結ぶことを通して、後に定住してきた集団を既存集団に吸収することである。異なる親族間の「差異」を強調しながら、儀礼などの日常実践や異なる集団の結合を通してこれらの「差異」を規範化しているのである。

通婚について、G 村は内婚制（族内婚と村内婚）が奨励され、そのうえで、80 年代以前は父方交叉イトコ婚を優先していた。その理由は 3 つあると解釈される。①「トン族は肉、漢族は腸、ミャオ族は骨から生まれた」「人肉が足りず、雌豚・猫・蛇などの動物の肉も混ぜた」といった由来譚が語る「差異」から、民族の差別とトン族内部の階層が形成された。②村の定住史に基づき、先住者は自分を地元民とし、後来者を外来者として集団間の通婚を忌避した。③村外から嫁いで来る女性、特に漢族女性は身に不潔な霊が憑いていると信じ、通婚を忌避していた。以上のように、異なる言語・衣服・食の差異・憑きものなどの身体表現により、通婚の範囲が限定されたことが明らかになった。本発表では、調査地のトン族の人々の政治運営および文化的イデオロギー、地縁と血縁という二つのカテゴリーの中に入り組んで相互作用してきた身体と差別との関係について考察する。

【Meeting Room 4】パネル2

もめごとを／が生み出す関係 雲南ラフにおける移動と身体

堀江 未央
(岐阜大学)

本発表では、中国雲南省西南部の山地に住むラフの人びとの暮らしと自他関係のあり方と、近年彼らが盛んに参与している都会への出稼ぎとの関わりを論ずる。特にラフの身体観に着目しつつ、もめごとが人の移動を生み出し、他者＝漢族とのあいだに新たな関係が取り結ばれていく様相を明らかにする。

雲南省の山地に居住するラフは、狩猟採集や焼畑耕作を主な生業とし、移動性の高い暮らしを送ってきたが、共産党中国の成立以降、居住地に戸籍登録され定住するようになっている。定住村落での暮らしのなかでは、隣人や親族との身体的な接触が多く、もめごともし生じる。

本発表ではまず、ラフの身体と他者との関係性を提示する。ラフの身体と健康は他者との関係性に立脚する部分が大きい。たとえば、人はオト（物理的身体）とオハ（魂）とで構成されており、同一家屋の炉に魂を有する「ひとつの家の者」たちの健康は、その家の家長夫婦の良好な関係に基づいている。また、人を構成するサブスタンスのひとつに「オボ *aw bon*（運気）」があり、オボが少なくなると不運や不調が続くため、「オボを行う *bon te ve*」儀礼の必要が生じる。これは儀礼参加者が主催者にオボを分け与える手続きであり、近いキョウダイや親せきたち、姻戚関係にある同一村内の人びとは参加を義務付けられる。親族やキョウダイとは、こういった儀礼の際に参加を要請され、サブスタンスを分けあいつつ助け合うべきものだとことあるごとに語られる。

しかし、土地利用や相続などをきっかけとして親族や姻戚のあいだで諍いが起こると、オボの交換を拒否する態度が見られるようになる。それは同時に本人を脆弱にする行為でもあり、その行動は「狂気」に近いものと見られるようになる。こういった諍いが起こった際、かつては他地域へ移住し、物理的に距離を置き軋轢を避けるという選択肢があったそうだが、近年では沿海部への出稼ぎがそれに代わる選択肢になりつつある。

2016年ごろまでの調査の限りでは、ラフの若年男性の多くは中学を卒業すると出稼ぎに出ていく。しかし、その多くは堅実な蓄財のためというよりも、外界への憧れに起因するものが多く、また親子喧嘩ののちに息子が出稼ぎに行ってしまったという話は少なくなかった。出稼ぎは、中国各地で論じられるような家族の経営戦略というよりは、村でのストレスやもめごとへの対処のひとつという位置づけも持っているように見える。本発表では、そのようなもめごとの結果としての出稼ぎが、新たな他者＝漢族との接触を増加させ、ラフに大きな影響を与える強者としての漢族だけではなく、同じ労働者としての「中国人」という呼称がラフの語りに登場しつつあることを指摘する。そして、その漢族との関係変化を、2つの可傷性の概念に依拠しつつ論ずる。

【Meeting Room 4】パネル2

身体からみる宗教・民族的差異の動態

南部フィリピンにおけるムスリム・キリスト教徒混住社会の事例

吉澤 あすな

(京都大学・博士課程)

本発表は、南部フィリピンにおけるムスリムとキリスト教徒との身体接触を発端とする親密な関係の継続／途絶について、宗教・民族的差異の動態に着目して検討する。具体的には、隣人関係において規範や宗教帰属の違いを一時的に無効化するような身体接触が可能であるのに対し、その延長線上にある通婚関係では、異宗教間結婚であることの意味が強化・固定化されていく状況を考察する。

南部フィリピンでは米植民地期以降、キリスト教徒の入植によってムスリムとの混住が進んだ。1970年頃にムスリム組織が武装闘争を伴う分離独立運動を開始した。同時期に政治家間抗争の絡む暴力事件も頻発し「宗教対立」の様相を呈した。調査地であるミンダナオ島北部の地方都市は、キリスト教徒が人口の多数派であるが、ムスリム民族集団のマラナオの人々も就学、就労などを目的として数多く居住している。

本発表はまず、貧困層集住地域の隣人関係における身体接触について論じる。調査地のムスリムとキリスト教徒は、一定の心理的距離と警戒心を抱きつつも、隣り合って暮らしている。この地域の住民は概して経済的に不安定であり、常に災害や病気のリスクに晒されている。それ故に、人々は生活を立ち行かせるために必要な相互交渉を日常的に行っている。あるムスリム女性は夫や姉と共に、キリスト教徒男性の家を訪れた際、糖尿病の合併症で指から膝上まで壊死した男性の足を見て、壊死した患部を触りながら病状についてあれこれと尋ねた。これは、ムスリムとキリスト教徒が出会う場で、どう振る舞うべきかの共有された規範がない時に、とっさに身体が反応した行為のように見える。こうした個別的・偶発的な接触が生じた際、対立関係の言説やジェンダー規範は留保されている。

本発表は次に、ムスリム男性とキリスト教徒女性との結婚を取り上げ、宗教や民族的差異を意識しない接触が発端であるにもかかわらず、継続的関係のなかで異宗教間結婚としての意味づけが増していく事態を論じる。調査地において、ムスリム男性とキリスト教徒女性との結婚は、例外的ではあるが強く忌避されてはおらず、差別の対象になることもない。当事者は、自身の結婚を、偶発的な身体接触の延長線上にある経験として語った。そのような関係は、調査地において居住地をある程度自由に変更できること、婚姻に関する複数の法制度が並存する状況によって可能となっている。しかし、婚姻関係が長くなるにつれ、即興的な対応で解決できない場面—例えば、子どもの信仰選択、一夫多妻婚、パートナーが突然敬虔になる—が訪れる。そうした出来事を通して通婚夫婦は、互いの宗教帰属を意識し、異宗教間結婚として関係を定位する必要に迫られる。特に、マラナオ・ムスリム社会のジェンダー規範や男性性が強く顕在化する一夫多妻婚は、キリスト教徒の妻に、その規範を内面化して従うか、パートナーもろとも完全に拒絶するかの二者択一を強いてしまう。